

思索と言語

言葉を科学する：人間の再発見

奥 聡

Day 03: 単語の話 (1)

1. Pre-class Work 03

(B) サピア・ウォーフの仮説とは(先週の授業で紹介した言い方によると)次のどれか？
最も適切なものを1つ選び○をつける。 [10]

- a. 言語とその言語を話す人の思考とは密接な関係がある
- b. 単語は音と意味の恣意的な結び付きである
- c. 思考が話す人の言語を大きく限定する
- d. 諸言語は無限に相互に異なりうる
- e. 言語が話し手の思考を大幅に規定する

(C) 次のうち「言語運用」に当てはまるものには「P」の記号を、「言語能力」に当てはまるものには「C」の記号を、それぞれの()に書きなさい。 [10]

- a. 外的要因に左右される ()
- b. 頭の中の潜在能力 ()
- c. 外的要因に左右されない ()
- d. チョムスキーのいう言語学の研究対象 ()
- e. ノイズを含むことがあるデータ ()

*科学は当たり前前に驚くことから始まる (中谷宇吉郎、ノーム・チョムスキー)

でも、自分の常識を疑うのはやさしくない。どうする？
アインシュタインいわく「 」

2. どうやってそんなに覚えるの？

- (1) 単語は音(形式)と意味(概念)の恣意的な結び付き (ソシユール)
- (2) 就学前後(6歳児)の平均語彙数 (英語：ピンカー (1995) (上)p.204ff)
 - a. 4000 語
 - b. 7000 語
 - c. 10000 語
 - d. 13000 語

- (3) 1歳の誕生日から5年間で、1日平均()語強の単語を覚えていく。#
- (4) 名前と電話番号の組み合わせ
写真つき名簿の顔写真と名前の組み合わせ どのくらい覚えられる?
- (5) 平均的なアメリカ人高卒者の語彙数 = 60000語 (少なく見積もっても)
- (6) 「子どもは頭が柔らかいから」(?)
=> 単語の獲得能力において「頭が柔らかい」とは具体的に何か?
- (7) 言語獲得中の子どもが直面している状態 (1)
音の流れ (物理的にはただの空気の振動) から単語を切り分ける (=>CD5)
- (8) 言語獲得中の子どもが直面している状態 (2)
「ガヴァガイ」問題 (哲学者クワインによる)
- (9) In Class Work 03-1: 「ガヴァガイ問題」
- (10) a. *The Whole Object Assumption*
A new word refers to a whole object.
(Markman, E. (1989) *Categorization and Meaning in Children: Problems of Induction*. MIT Press. p.26)
- b. *The Type Assumption*
A new word refers to a type of thing, not just to a particular individual.
(Clark, E. (1993) *The Lexicon in Acquisition*, Cambridge University Press. p.50)
- (11) 子どもが効率よく語彙を獲得していける理由の1つは、例えば(10a)(10b)のような仮説を子どもは生まれつき持っているから
- (12) 「単語(word)」という概念。言語を分析する上での重要な基本単位。しかし、実は定義がとても難しい。=>言語学者はどうやっているか?

3. 形態素と「単語」

- (13) 意味・機能を持つ最小の言語単位 = 形態素 (morpheme)
- a. 「うどん」は1つの形態素
- b. 「食べ」は1つの形態素
- c. 「たい」は1つの形態素
- (14) a. 自由形態素 (free morpheme) : 音韻形態的に単独で使える
うどん、花、会社、あひる
- b. 束縛形態素 (bound morpheme) : 音韻形態的に他の要素に依存。
単独で使えない
「食べたい」の「食べ」や「たい」
「大きさ」の「大き」や「さ」 「再開発」の「再」
- (15) 自由形態素がわれわれが普通言う (単純) 「単語」

- (16) 母語のある単語を「知っている」とは、その単語の何を知っている？
- (17) 単語という概念に関して、自分たちの無意識の言語知識を少し「客体化」してみよう (very informal)

4. しりとりゲーム (1)

- (18) 前の人が「みなと」で終わりました。次に、しりとりで使えないのはどれ？
それはなぜ？
- とけい
 - とても
 - とける
 - とんでもない
- (19) 無意識のうちに、品詞の区別を知っている
(*名詞しかダメだよ、と言わなくても子供でも理解している)
- (20) ある単語を「知っている」とは？
- 意味
 - 発音
 - 品詞 (その単語の文法的特性：形態的・統語的性質)
- (21) 意味だけではなく、品詞の特性に従って個々の単語を使っている。
- 食事 => *食事・たい
 - 食べ => 食べ・たい
- (「～」は動詞につく形態素) < = 無意識の言語知識
- (22) 束縛形態素「～さ」の性質
- 大き・な => 大き・さ
 - 忙し・い => 忙し・さ
- (「～さ」は形容詞の「～な」や「～い」にとって代わって、名詞を作る形態素)
- (23)
- *食べ・さ (「食べること」を表す名詞にはできない)
 - *机・さ (名詞「机」につくことはできない)
- (24) 形態論 (morphology) : 単語を組み立てる頭の中の (無意識の) 仕組み
品詞という概念・品詞の区別がここではとても重要
- (25) どの人間言語でも、単語は意味だけでなく、「形態的統語的」性質によっていくつかのカテゴリーに区別される (=品詞)。そして、それに従って人は単語を使っている (品詞を無視して、意味だけに頼って単語を使う人はいない)。
- (26) 習わなくても自然に品詞の区別を身につけている
- 大き・な => 大き・さ
 - 忙し・い => 忙し・さ
 - *食べ・さ
 - *机・さ

(27) 言語獲得の不思議

「～さ」が実際にどのように使われるかのデータにはたくさん触れる

「～さ」がどのようにには使えないかは誰からも教わらない

=> 全ての母語話者は、「～さ」がどのように使えるかだけでなく、「～さ」がどのようにには使えないかも知っている！ どうやってこの知識を身に付けた？

(28) どの言語のどの話者も(27)と同じように、形態素の意味・機能を習得します。

a. 事例に触れるだけ

b. 使われ方の規則（使えない場合はどのような時かも含め）を獲得

(29) 言語獲得の論理的問題

チョムスキーはこれを「言語獲得の論理的問題(the logical problem of language acquisition)」または「プラトンの問題」とよんだ。人間の言語能力を解明しようとする言語理論は、この問題に対する解答を用意しなければならない。

参考文献：影山太郎(1997)「形態論とレキシコン」西光義弘(編)『日英語対照による英語学太異論 — 増補版』(くろしお出版)

5. しりとりゲーム (2)

(30) In Class Work 3-2 : (複合) 語か句か

6. 今日のまとめ

(31) a. 子どもの単語獲得能力に関する仮説

b. 形態素

c. 単語を知っているということは？

d. 言語獲得の不思議

*「ちょっとだけ Feedback」を毎回丁寧に見ておいて。一つ一つ授業では採り上げることが出来ませんが、大切なポイントがいくつもあります。

*次回の最初に pre-class work04 を行います。今日の講義内容の確認問題を一部含むので、しっかり復習しておいて。

*皆さんの提出物を研究教育に利用することに関する許諾を WebTube で行います。必ずやっておいてください。

*授業運営効率化のため座席をして指定しています(学期中に一度席替えの予定)。現在の席でどうしても都合が悪い事情がある人は申し出て

*最初の2回を欠席した人は、授業で配布した資料が WebTube 上に貼り付けてあるので適宜利用して

Homework Assignment 03

*WebTube にログインして、「言葉を科学する」のクラスに入り、「03-HW03 (言葉科学)」を期限までにやりなさい。(水曜日午後 9 時)

<https://webtube.c11.hokudai.ac.jp/>

(注意: WebTube にログインして「言葉を科学する」のクラスが見えない人は、至急奥 (satoshio@imc.hokudai.ac.jp)まで連絡ください。WebTube そのものにログインできない人も至急連絡をください。WebTube のログイン ID と PW は、ELMS のシステムと同期しています。

さらに興味のある人に文献案内:

影山太郎(1997)「形態論とレキシコン」西光義弘(編)『日英語対照による英語学太異論 一増補版』(くろしお出版)

窪菌晴夫(1995)『語形成と音韻構造』(くろしお出版)

窪菌晴夫(2002)『新語はこうして作られる』(岩波書店)

ピンカー・S. (1995)『言語を生み出す本能 (上・下)』NHK ブックス (日本放送出版教会)

O'Grady, W. (2005) *How Children Learn Language*, Cambridge University Press.